

高校 3 年生のコンクールまで部活を続けた一人として

高橋 洋 (2 期 1991 年卒 フルート)

吹奏楽部のホームページにあるように、吹奏楽部のこれまでの歴史で数少ない、高校 3 年生のコンクールまで部活動が続けた高橋 洋です。高槻高校でなければ高校 3 年生まで部活を続ける人は数多くいますが、当時の高槻高校でも暗黙の了解として高校 2 年生の大会か文化祭が終われば部活は引退というのが不文律としてありました。

今は学校側のルールにもあるでしょうし、カジュアルコンサートができて高校 2 年生の 3 月で全員引退するシステムが出来上がっているのも、僕のようなイレギュラーな部員は出てこないと思います。今回は吹奏楽部の歴史の中にこんな時期やこんな人間がいたことを残しておこうと思って書いてみました。

まずは当時の状況ですが、1989 年秋に他の部から中途入部しました。「平成元年」です(笑)、高校 1 年でした。ごく少数を除いて吹奏楽部経験者はおらず、楽器演奏歴は 2 年がもっとも多く、僕も全くの初心者でした。部員数も少なく、活動年数も少ないので「部」より 1 ランク下の「吹奏楽同好会」でした。曲目も「海兵隊」や「ワシントンポスト」など今の吹奏楽メンバーからすれば初心者教育曲をみんなで楽しく演奏させてもらいました。楽器指導者もほとんどのパートにおらず、教本を見て、顧問の武部先生に直接音出しから教えてもらいながらの練習でした。そんな状態でしたから、吹けなくてもすぐメンバーという不思議な状態で、演奏の時にフルートパートの席に一緒に座らせてもらいました。当時、フルートパートは指揮者台から最前列に横一列でしたので、武部先生の指揮を間近で見ながら後ろから全体の演奏を聴く中で、合奏の楽しさを迫力に惹かれていったのを覚えています。

高校 2 年生になり、同期とフルートパートの 1 St を任され(楽器歴半年)であり、運営では副部長と会計でした。あと、中学 1 年、2 年と部員が入ってきて、この年(1990 年)くらいから人数も室内合奏団の延長からブラスバンドになってきて、体育館の舞台がうまるくらいになっていました。コンクールでは「国境線」序曲、地区大会 B 編成で出場し銀賞をもらうことができました。

コンクールか、10 月の文化祭で引退するのが当時の高校 2 年生の部活のあり方だったのですが、この時期の私は、コンクール会場で演奏した時の迫力とあのお祭り感にも似た高揚感を引きずっていたこと、コンクール演奏時に緊張して唇や足が震え音がうまく出せなかった悔しさ、そして何よりもパート練習して、みんなで合奏することが楽しくてしょうがない状態でした。後輩も増えて、中学 1 年からはじめた後輩も経験が 2 年、3 年と上がつ

ていき、合奏がカッコよくなってきたのを最前列で聴けたのも嬉しかったです。

あと、これはこじつけになるのかもしれませんが、当時の部員の分布が高校 2 年生（私たち）が多く、高校 1 年生、中学 3 年生が極端に少なく（数名レベル）、あと、中学 2 年生、中学 1 年生という状態でした。ここで高校 2 年生が抜けると楽器編成と部活運営に問題が発生するリスクがありました。

このような背景の中、同じように合奏の好きな同期が他に 3 人いてくれたので、4 人で来年のコンクールまで残留することにしました。4 人とも志望校が京都大や京都府立医大などを目指しながらのコンクール挑戦でした。周囲からは「無謀」「浪人確実」などともいわれることもありましたが、夕方 6 時まで後輩としっかり練習。予備校なども行きませんでした。

高校 3 年生でコンクールに出られたのは他に要素がありました。

一つは、まだ吹奏楽部の実力から A 編成は難しく、もう一度 B 編成で出演しようということでしたので地区大会のみで終了なので 8 月上旬でコンクールが終わること

すぐ下の学年が不在のため、パートに残留しても影響が少なかったこと。具体的にはフルートパートは高校 2 年生の時は高校 2 年生 2 名、中学 3 年生 2 名、中学 2 年生 1 名の 5 名でしたが、高校 3 年生の時は高校 3 年生 1 名（私）、高校 1 年生 2 名、中学 3 年生 1 名の 4 名でした。今の吹奏楽部で、無理に残留すると人数渋滞がおきますよね。

当時のコンクール直前期の練習は、音楽室か体育館の舞台でした。冷房が共に無く、周囲への騒音、運動部への配慮などから窓を十分に開けられず、体育館は緞帳もおろして練習でしたので、扇子は必須でした。

この年は「アパラチアン序曲」でした。「春の猟犬」という案もありましたが、現在のレベルからはまだ難しいのと、B 編成の演奏時間から難しいというのがありました。

実際の演奏時、この時も緊張もして、しかも隣と少し余裕あるのか自分の音が本当に聞こえなかったです。しかもフルートはなぜかソロパートがある(笑)。この年は後輩に助けてもらいました。高校 2 年生の時と比べ曲のレベルが上がり（自分のレベルもちょっとあがった？）、演奏者も増え、中学からのたたき上げも増えた中での演奏。いまだに思い出しても涙がでそうになるような感動の時間でした。初めての金賞（あの「ゴールド」という言い方は好きです）も後輩たちと味わうことができ、もっともよい形で吹奏楽部での高校生活を終えることができました。

後日談ですが、コンクールが終わると同時に皆からほぼ 1 年遅れの受験勉強開始でした。推薦入試でも一般入試でも、当然(笑)現役合格はなく、1 年浪人しても大学共通テストの点数は伸びず、家にお金もないので、自治医科大学医学部に進学しました。他の 2 人も合格

までに一浪しました。ただ、4人のうち1人は現役で京都大学法学部に合格したので、部活と勉強は個人の努力次第と思った次第です。

高校3年生まで周囲を説得して頑張って部活をするかということについては、今の吹奏楽部ではお勧めしません。なぜなら中学1年から高校2年まで5年間同じ学校の同じ部活で過ごせるからです。5年間部活をしてそのうち4~5回のコンクール、更には5回の文化祭とカジュアルコンサート。これだけで自分が経験してきた吹奏楽部の2倍の経験をしていますから、十分吹奏楽部を満喫できるのではないかと思います。

自分が高校生活3年間ですべて捧げて、しかも浪人までして吹奏楽部にいたのは、やはりしんどい練習や思いをした後の合奏の迫力とハーモニーの魅力です。練習は死ぬほどハードだと思いますが、あの練習は中学や高校でしか体験できません。私も卒業して30年以上経過しますが、アパラチアン序曲の1stフルートのパートはいまだに暗譜で吹けます。頭がというより指が覚えています。あと、ブラスバンドの合奏をテレビで聴くと自分もあの中にいたのだという思いがこみ上げてきます。

これからも一人一人の力を合わせて良い音楽を作り上げるそんな吹奏楽部であってほしいと思いますし、先輩としてできるお手伝いをさせていただければと思います。

長文にお付き合いいただきありがとうございました。

2024年5月3日初稿寄稿